

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	高松市立牟礼北小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	小学校体育科授業における「テニス」の授業の実践研究

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動に至る経緯

平成29年に告示された学習指導要領（体育編）において、「バドミントンやテニスを基にした簡易化されたゲーム」が、ネット型ゲームの例示として示された。その中でも、テニスにおいては、近年の日本人のテニスの活躍を見ても、子どもたちにも身近で興味のもてるスポーツであること、世界的に見ても愛好者が多く、性別や年齢に関わらず楽しめること等の良さが挙げられ、今後テニスをきっかけにして運動に肯定的に親しむことができるようになる児童も増えてくるのではないかと推察している。

しかしながら、プロスポーツで行っているテニスのルールをそのまま小学校での体育授業で行うことには難しさがあると考えている。そこで、本実践を通して、小学校段階でのテニス授業の在り方を模索したいと考えた。

2. 活動・研究の目的（ねらい）

私たちは、小学校段階でテニスのルールをそのまま授業で行うことが難しいと考えた理由を、①打具を使う技術の難しさ、②運動量の確保の難しさ、③学習内容が不明瞭であることの3つと捉えており、この3つの課題を克服できる学習を展開することが小学校段階では必要だと考えた。

そこで、この3つの課題（①打具を使う技術の難しさ、②運動量の確保の難しさ、③学習内容が不明瞭）を克服するための授業づくりを工夫し、小学校段階におけるテニスの授業の在り方を探ることを目的とした。また、本校は、第5学年が2学級あることから、ボールの種類やルールを各学級で意図的に変えることで、授業比較を行い、子どもたちにとって意味があり、苦手な子どもでも授業内で活躍できるテニスの授業を模索する。

3. 活動内容

上記に示した3つの課題を克服するために、本実践では授業づくりについて以下の3点を工夫した。

① 打具を使う技術の難しさを解決するための工夫

手に装着するラケット（手のひラケット）を用いて、用具操作を簡易化すると共に、キャッチしてもよいというルールを付加することで、運動が苦手な子どももゲームに参加できる状況をつくる。ボールについては、1学級はテニス練習用の小さいスポンジボール、もう1学級はゴム製でよく跳ねる比較的大きいボールを用いることで、比較を行う。

② 運動量の確保の難しさを解決するための工夫

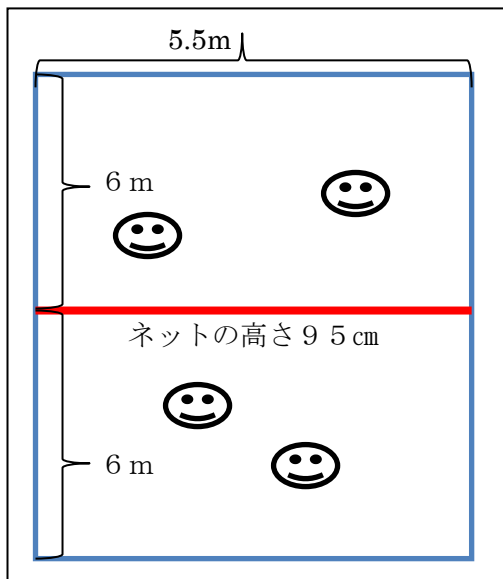
これまでの実践では運動場でゲームを行うことが多く、コートをつくるための準備、コートが広いためにゲーム中の支援が難しいという課題が挙がっている。その一方で体育館での実践では、コート数が少なくなってしまうことや、ゲームの参加人数が少なくなり、運動量の確保が難しいことが課題として挙がっている。

そこで、普段の体育の授業でも行うことができ、運動量を十分に確保できる授業にするために、体育館で4コートを取り、16人（ダブルス戦）が同時にゲームできるように工夫する。

③ 学習内容が不明瞭ということを解決するための工夫

これまでの文献研究や、申込者での話し合いを通して、小学校段階でのテニスの授業では、「ラリーの中で、相手が返球しにくい攻撃を行うこと」を最終的な学習内容と設定すべきと考えた。そのために、どのような攻撃方法が得点しやすいかという学習を、得点データをもとにして学習を進めることとする。また、どのような作戦をチームで行うかについて、チームで話し合う活動を取り入れる。以上を2学級とも目指すことで、どのような単元構成がテニスの授業において学習内容の獲得に適切なのか、どちらのボールが学習内容の獲得に有効に働くかということについても模索していく。

これまで述べてきたことを踏まえて、コートとルールを設定した。概要は以下の通りである。



【基になるルール】

☆用具類

- ・ネット 高さ9.5cm、長さ5.5mの簡易ネット
- ・ボール スポンジボール（1組）、ゴム製ボール（2組）
- ・コート 縦1.2m×横5.5m
- ・ラケット 手のひラケット

☆ルール

- ・ダブルス制で行う（2人がゲームに出場し、残りの2人は得点と記録）。
- ・1チームの人数は4名、ダブルス2つの合計得点で勝敗を競う。
- ・1試合4分で行う。
- ・ペアと交互に打つ必要はない。位置も自由。
- ・サーブは自陣の真ん中の線から下からゆっくりとしたボールで打つ（ノーバウンドで返してはいけない）。
- ・サーブは1回失敗してもよい。
- ・ノーバウンドまたはワンバウンドで打つ。

① 打具を使う技術の難しさを解決するための工夫

手のひラケットを着けることで、操作技能が緩和され、特に運動が苦手な子どもも安心して運動に取り組むことができた。「普通のラケットなら当たらなかつたけれど簡単に当たる」、「ねらった所に打つことができる」などの肯定的な感想が多かった。また、特別支援学級の子どもにもラケットが扱いやすかつたようで、体育ではあまり活動しない子どもなのだが、壁打ちを何度も何度も練習する様子も見られた。また、キャッチするというルールを付加したことで、どの位置でキャッチするか、どのような場面でキャッチするかといった学習内容につながる話し合いを行うことができた。



② 運動量の確保の難しさを解決するための工夫

体育館で4コート取ったことで、16人が同時にゲームを行うことができた。ゲームをしていない子どもも審判をしたり、得点データを取ったりしたことで、質の高い学習を展開することができた。ただし、スマッシュしたボールが別のコートに入ってしまうといった課題もあったため、対応策が必要だと考えた。

③ 学習内容が不明瞭ということを解決するための工夫

簡易化されたゲームのもとで行ったため、学習内容に到達しやすかつた。子どもたちは、得点につながるための位置（ねらう位置、スマッシュをする位置）について、グループ内で取った得点データをもとに考えた。そして、各グループで取ったデータをそれぞれプラ板に書き、全グループのプラ板を最後に重ねることで、子どもたちは得点につながるための要素を視覚的に学ぶことができた（右写真参照）。さらに、得点を多く取っているダブルスの子ども達のゲーム動画を全体で見せたことで、「1回の攻撃でなく、相手を動かしながら空いているスペースをつくり出す攻撃を行うことが有効な攻撃方法だ」という答えにたどり着くことができた。

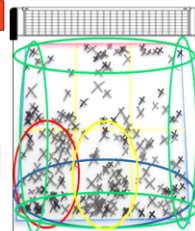
データ 得点が決まった場所

ぎりぎりやネット際

相手に深い場所

バックハンドになる場所

人と人との間



上記で示したことについては、2学級ともに共通している。しかし、スポンジボールは打球速度が速く、テニスに近いゲーム様相であったため、ボール操作技能がより求められること、逆に、ゴムボールはボールが大きいためキャッチに適しているため、操作技能が易しいが、打球スピードに欠けることが違いとして表れた。以上を踏まえると、単元前半ではゴムボールからはじめ、単元が進むにつれて徐々にスポンジボールに移行していくことが有効ではないかと捉えた。

4. 子どもたちへの効果（成果・課題）

本実践を通して、以下の3つの成果が挙げられた。

- 「手のひラケット」を用いたことで、用具操作の技能が保障できたこと
- 「ラリーの中で攻撃を組み立てる」という学習内容が、段階的に子ども達の中に定着したこと
- キャッチをルール化したことで、苦手な子どもがスマッシュで得点を取ることができたこと

しかしながら、課題としては以下の2つが挙げられた。

- ▲テニスなどの攻守一体型とソフトバレーボールなどの連携型を学年でどのように配列するかを考えること
- ▲体育館での場所の限界があること（ボールが他コートに入ってしまうこと）

以上を踏まえつつ、今後も小学校体育科授業における「テニス」の授業の在り方を模索していきたい。